

社会の中のまゆねえちゃん

桃山学院中学校 一年

谷口 綾音

「あやちゃん、はよ、これかたづけてかえりや。」

「わかってるよ、まゆねえちゃんちょっと待ってや。」

これは、私が祖母の家に遊びに行った時に、必ず交わすやりとりです。まゆねえちゃんは私の叔母にあたる人で、明るい障がい者です。障がいの程度はわかりませんが、とても几帳面で、シリーズになっている本の順番をきちんと並べ替えたり、トランプを使った後に、数字順に一から四枚ずつマークの順番も決めて並び替え片付けます。

そして、小学校から今まで公文に通い続けひらがなとカタカナの練習をずっと続けています。日本一長く公文に通い続けているのかもしれません。きっと三十年以上の公文歴です。

スヌーピーのぬいぐるみが大好きで、ソファーで四匹くらい飼っています。四匹の家族構成が決まっていて、置く場所を間違えると鋭い指摘がとんできます。姪の私から見ても、とっても可愛らしい面白い叔母さんなのです。家が近いので、私が生まれた時からまゆねえちゃんと関わっています。まゆねえちゃんのことを、ちょっと人と違うな、と思ったのは私が年中くらいだったと思います。父にまゆねえちゃんのことを聞いた時に、笑いながら、そういう人やねん、という一言で特に障がい者であることを説明された記憶はありません。色々なことに対してこだわりが強い分、関わり方が難しいなと思うこともありますが、そのコツさえつかめば、明るく面白い人です。

まゆねえちゃんは、一人で電車に乗り、作業所へ仕事に行っています。朝潮橋から地下鉄で弁天町まで行き、JRに乗り換えて芦原橋まで行き、更にそこから作業所のバスで通っているのです。昔、通勤途中の電車で迷子になったようで、警察にも届け、家族総出で探し回ったこともあったそうですが、だいぶ経ってから作業所へたどり着いたそうで、未だにその経路は謎のままであります。おそらく、電車に乗っていた人が、迷っている様子を見て、持っている定期などから乗り換えを教えてくれたりしたのではないかとのことです。そうやって周り

の人に助けてもらいながら、まゆねえちゃんは社会と関わっているのです。近くの市場に行っても、買い物のメモを持っていたら、顔見知りのおばちゃんがその品物と一緒に探してくれる。レジでちゃんとお金も払える。駅まで行く道で、近所の人には会った時、まゆねえちゃん特有の大きな声で「おはよう」と言ったら「おはよう、まゆちゃん気を付けて行きや。」と声をかけてくれる人がいる。あまりに当たり前になっているこの光景が、実はとても優しさにあふれているのだと気付かされます。

私の祖母は、“ふらっと”という就労継続支援B型の仕事場の代表者です。そこには、様々な障がいを持った人がいて、それぞれ違った個性があります。視覚障がい者だけれど、画用紙を数えたら誰よりも正確で早いプロ。知的障がい者で、ガチャガチャの景品を詰めるのが得意なプロ。他にも、色々な特性を持ちながらも、一生懸命仕事をする人たちがいます。時折、言い争いや、間違えて怒られたりしながらも、和気あいあいと仕事をする姿を見ると、障がいがあっても居場所があって、仕事をして役に立てているという実感が持てるいい職場だなと感じます。

障がい者だからと差別したり、特別扱いするのではなくて、人としての個性だと思えるような人が増えていけばいいなと思います。そのためにはまずは私が、まゆねえちゃんだけではなく、色々な特性のある人に出会ったときに、それを理解し配慮しながらも、“普通に”接することができる人でありたいと思います。